

令和八年

十一月六日（日）

十二時三十分頃
京都御苑出発

※小雨決行、雨天中止

寛永行幸四百年祭
行列再現

行列の見どころガイド

公式Webサイトはこちら

寛永行幸四百年祭
実行委員会





寛永行幸

寛永行幸四百年祭

《二条城行幸図屏風》部分
京都市指定文化財 江戸時代 17世紀 泉屋博古館蔵

四百年を経て、令和の京都に甦る
再現行列の見どころ

寛永三（一六二六）年九月六日、後水尾天皇が御所から二条城へ向かった寛永行幸。行列は、総勢九千人以上、馬五百四十頭・牛車十二台・輿四百七十基が連なる大規模なものだったと記録されています。

再現行列は、行幸のキーパーソンであった中宮和子・将軍家光・後水尾天皇の三人を軸に、数々の史料による考証を踏まえ、三グループ・約四百五十人でそのエッセンスを表現します。

ハレの日の特別な装束や、行幸に付き従う特別な役割の人々の再現のほか、一般公募を含む参加者が事前の礼法研修で学んだ歩き方や所作も見どころです。また、屏風絵にも描かれた沿道の観衆を再現する、装束観覧席も京都御苑に設けられます。



※再現行列のルートは史実とは異なります ※時刻は行列先頭の予定（目安）です

再現行列順番

京都御苑 出発 ◀ 後水尾天皇行列 ◀ 将軍家光行列 ◀ 中宮和子行列 ◀ 二条城 到着

雅楽が彩る行列



寛永行幸では、天皇の鳳輦は50人の伶人（楽人）が奏でる雅楽とともに二条城へ向かいました。そのとき演奏されたと考えられる「安城楽」が復曲され、二条城で披露されます。また再現行列の道中も「五常楽急」が奏でられます。

出発・到着の儀式

史実では、まず将軍家光が諸大名を引き連れて二条城から御所へ天皇をお迎えに赴き、内裏で儀式を執り行ったのちに二条城へ戻り、天皇の到着を待ちました。

こうした行幸の実際の行程を表現するために、江戸幕府の儀礼を記録した史料を考証のうえ、当時の儀式の要点を取り出し、出発式（京都御苑　建礼門前）と到着式（二条城　東大手門前など）で再現します。

中宮和子行列



中宮和子（ちゅうぐうまさこ）
豊鑑寺に伝わる、実際に和子が着用したとされる十二単の色柄を模した装束で牛車に乗り登場

随身（ずいじん）
貴人の行列に付き従う警護役。弓矢や太刀などの武具を携えています

公卿（くぎょう）
高位の貴族が和子の先払いとして騎馬姿で登場

女人列（にょにんれつ）（再現行列では徒歩）
貴人に仕える女官は輿や牛車に乗って移動しましたが、今回の再現行列では打掛に懐剣の武家風スタイルと、市女笠に虫垂衣の公家風スタイルの徒歩女人列で表現されます

白丁（はくちょう）
宮廷の儀式や行列などで様々な業務に就いた官位のない人々。白く張りのある簡易的な狩衣が目印

中宮職（ちゅうぐうしき）
中宮に仕える宮中の役所の職員役を、活動的な狩衣姿で表現

徳川秀忠の娘に生まれ、十四歳で入内（じゅだい）してのちに後水尾天皇の中宮となり、公武をつなぐ存在となった和子の行列。当時の高貴な女性は外に姿を見せないものでしたが、再現行列では、実際に和子がまとったものを模した十二単姿の和子や、打掛（うちかけ）や袿（うちき）を身につけた女官が華やかな姿を見せ、ファッションや芸術を愛し庇護したと伝わる中宮の雰囲気を伝えます。再現行列では先頭を進みます。

【入内（じゅだい）】
天皇の住む御所に入り、后妃となること

【中宮（ちゅうぐう）】
天皇の后妃のうち、皇后にあたる地位の称号

【十二単（じゅうにひとえ）】
唐衣裳（からぎぬも）や女房装束と呼ばれた、宮廷の成人女性の礼装。十二単は後世の俗称

【狩衣（かりぎぬ）】
脇が大きく開き動きやすい仕立ての衣服。貴族も狩猟用や普段着として着用した

各行列の図は《二条城行幸図屏風》の一部を、再現行列の列順とイメージに合わせて編集・再配置したものです。原図とは内容が異なり、また、再現行列の姿や人数を正確に示したものではありません。

将軍家光行列

大御所・秀忠とともに後水尾天皇を二条城に招き、徳川の権威と平和の到来を世に示した将軍・徳川家光の行列。行幸行列の際はみずから御所へ赴いて行幸の礼を述べ、その後天皇の行列を先導する形で二条城に向かいました。再現列では、将軍を警護する大勢の帯刀や長刀持ち、徳川一門など、武家らしい役柄の人々が行列を構成します。再現行列では中宮和子行列の次を進みます。

この「裾」に注目!



騎馬の人物の「一日晴」に注目

再現行列では、騎馬の人物（高位の公家や武家役）と牛車に乗った将軍・家光が、男性の正装「束帯」を着用します。束帯の色や文様には厳しい決まりがありましたが、寛永行幸のように特別な行事の際は「一日晴」として装束の一部に自由なものが許されました。再現行列では「裾（きょ）」などに豪華な生地を使い、当時の華やかさを表現します。

【京都所司代（きょうとしょしだい）】
京都と畿内の治安維持や、公家・西国大名の監視などを担った幕府の役職。老中に次ぐ強い権限を持った

【束帯（そくたい）】
公家男子の正装のうち、最も格式の高い装束の一つ。役割や位階によって、形や色・素材・模様などが決まっていた

長刀持ち（なぎなたもち）

家格などを表すため、大名ごとに付き従ったという長刀持ちを、今回は集団で表現

徳川一門（とくがわいちもん）

記録では尾張・紀伊・駿河・水戸の順に、将軍の後に続いたという徳川一門の姿を再現



京都所司代 板倉重宗（きょうとしょしだい いたくらしげむね）

将軍家光行列の先払いをつとめる。史実では160名以上の武家諸大夫が続いたという

帯刀（たちわき）

将軍が参内・社参などを行う際の警護役で、唐花の大紋の装束と太刀が目印

徳川家光（とくがわいえみつ）

屏風絵では葵紋を付けた二頭立ての牛車で表現。再現行列では記録に基づき復元した牛車と装束で登場します

後水尾天皇行列

鳳輦（後水尾天皇）（ほうれん ごみずのおてんのう）

中に後水尾天皇がおわす乗り物。屋根の上には鳳凰の飾りが

伶人（楽人）（れいじん がくじん）

再現行列では天王寺楽所雅亮会・大阪楽所・平安雅楽会の楽人が雅楽を奏でながら行列

日給札持ち（にっきゅうのふだもち）

史料にも屏風絵にも記録が残る、巨大な板を掲げた不思議な姿の道具持ち

道具持ち（どうぐもち）

傘子、草鞋や靴の入った箱、切台盤、燭台、打敷（敷き物）など、天皇の日常道具を運ぶ人々



隼人の兵士（はやとのへいし）

天皇の警護や儀礼上の役割を担った人々を、鳥甲と赤の衣で華やかに表現

幕府が朝廷への統制を強めるなか、多くの文化芸術を庇護して王朝文化を復興し、朝廷の存在感を高めた、第百八代後水尾天皇の行列。再現列では、伶人が行幸当時さながらに雅楽を奏で、天皇の乗り物・鳳輦を大勢の駕輿丁（かよちょう）が担ぎ、天皇が行幸先で用いる調度品や儀礼道具を運ぶ道具持ち役、鳥甲をかぶった隼人の兵士など、天皇列だけに付き従う役柄の人々が登場します。再現行列の最後を飾ります。

【伶人（れいじん）】
宮廷の儀式や行事で、雅楽などの音楽を演奏する楽人

【鳥甲（とりかぶと）】
鳳凰の頭をかたどったとされる、華やかなかぶり物。舞人や楽人もかぶった

【切台盤（きりだいばん）】
食事の際に用いる一人用の食卓

【日給札（にっきゅうのふだ）】
清涼殿で用いられた、殿上人の出勤状況を書き記す板のことと推察される

【鳳輦（ほうれん）】
天皇が公的な行幸の場合に使用した乗り物

寛永行幸とは？

「行幸」とは、天皇が御所からお出かけになることを指す言葉。寛永三（一六二六）年九月六日から十日にかけて、時の天皇である後水尾天皇が、二代将軍で大御所となった徳川秀忠と三代将軍家光の招きに応じ、二条城へ赴いたのが「寛永行幸」です。

武家のもとへの行幸は歴史上数度の異例なことで、幕府は威信をかけて準備を整えました。二条城は大改修され、戦乱で途絶えていた伝統や有職が儀式やもてなしのためにひもとかれ、善美を尽くした座敷飾りやぜいたくな料理、舞楽、能楽、和歌や管弦の遊びなど、最上級のもてなしが繰り広げられました。寛永行幸は、のちの日本文化に大きな影響をもたらす「寛永文化」が花開くきっかけともなったのです。

その寛永行幸の初日に行われたのが行幸行列です。天皇一行と大御所・将軍に全国の二百名以上の大名も加わったパレードは、天皇と将軍の融和と平和の到来を世を知らしめ、人々を興奮の渦に巻き込んだ歴史的出来事でした。

行列の人員や順番を探る史料

再現行列では、徳川家光の装束と牛車が史料にもとづき復元されています。古文書と行列を見比べてみるのもおもしろそうです。

寛永行幸記

『二条城行幸図屏風』のほか、数多く残る寛永行幸の記録のうち、いずれも『寛永行幸記』と呼ばれる二つの基本文献などを参考に、再現行列が構成されました。幕府のブレーンをつとめた高僧・以心崇伝が残した詳細な記録と、歌人としても知られる公卿の烏丸光広が記したとされる絵巻（別名『御行幸次第』）です。



崇傳記『寛永行幸記2巻』［1］、寛永3［1626］序。
国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1286958（参照 2026-10-31）

徳川家輿車図

将軍・家光の用いた牛車は明治時代初期まで二条城に保管されていたと伝わりますが、現在の所在は不明。そこで、信頼度が高いと目されている史料《徳川家輿車図》を参考に、側面に糸桜の蒔絵を施した牛車が復元されました。金具も絵図に沿ったシャープなデザインです。



『徳川家輿車図』、写。
国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1286958（参照 2026-11-11）

御装束之図

寛永行幸の際に大名が着用した装束は、一部は現存していることが知られています。また江戸時代前期に成立したと考えられる《御装束之図》には、家光が身につけたと思われる装束が記録されています。そのうち、文様が分かる部分図を軸に、家光の装束の復元が行われました。



『御装束之図6』（東京大学史料編纂所蔵）を改変

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
文化庁 令和8年度「文化資源活用事業費補助金（全国各地の魅力的な文化財活用推進事業）」採択事業
令和8(2026)年11月発行